

バス停のある風景

連載8回

秋田県仙北市角館町

取材日／2008年12月&2016年10月
交通事業者「仙北市民バス(スマイルバス)中川線」／バス停名「野田」



茅葺き屋根の家屋のまん前にあったバス停。マッチングが絶妙すぎ

秋を楽しみながら8年ぶりに訪れた同じ場所。 その風景に変化がないことに驚き、嬉しかった



まったく変化のない現在。変化がなさ過ぎるというもまた、驚きの現象だ

立派な屋根やベンチが用意されたものもあれば、ポールが1本、ポツンと建つだけのものもあるバス停。それは確実にバスがやってくる証。そんなバスと人が交差する「点」を追い続ける写真家の視点を見る。

タクシーで行った往時に反し、再訪はバスで大回りした

この日の取材は12月も押し迫った月末だった。当時まだ会社員だったので、少しだけ早めの年末休暇を取って臨んだ。東京駅での新幹線の出発が2時間程度遅れて、角館駅に到着したのは昼頃だった。午前中からバリバリ撮影する計画だったから、僕は気分が萎えてしまっていた。

駅前にある俳優の山谷初男のお店で食事をして、タクシーに乗車して「古い街並みがある集落を回ってほしい」と伝えたところ、案内してくれたのが、この野田のバス停だった。おあつらえむきに茅葺屋根の民家の前にバス停があったので、心躍らせて撮影した。さつきとは打って変わって、すっかりテンションが上がっていた。

今回、8年ぶりに田沢湖畔の乳頭温泉郷に家族で前泊していた。以前訪れ



写真集「バス停留所」
(撮影：柴田秀一郎/
発売：株式会社リトルモア)

《写真作家・柴田秀一郎(しばた しゅういちろう)》
1963年東京都生まれ、杉並区出身 日本大学法学部卒 写真家・竹内敏信に師事
1999年「現代写真研究所」修了
2005年「第11回酒田市土門拳文化賞・奨励賞」受賞
2006年「日本カメラ」連載
2010年 写真集『バス停留所』出版(リトルモア)
講談社「バスマガジン」連載中、八重洲出版「Old-Timer」寄稿作家。個展&グループ展多数。1999年より、日本全国のバス停を取材して、作品と文章にまとめている。
2014年1月末日に、一部上場会社を円満退職して、フリーランスに。
公益社団法人「日本写真協会(PSJ)」会員、「日本旅のペンクラブ」会員、「日本バス友の会」会員、「3.11を忘れない写真家の会」実行委員
<作品収蔵>土門拳記念館 <http://syashinkas.com/>

バス停のある風景

番外編

57年の歴史を閉じた 岩手県盛岡バスセンター をウオッチング



撮影日2016年1月26日
この世代の方々が多く見受けられた。真冬に暖房が利いていて、居心地良い空間だった



撮影日2016年6月25日/威風堂々のバスセンター、夜7時を過ぎると、本数が減って昼間の喧騒がうそうになる



撮影日2016年7月15日
バスの出入りが多いため、複数の誘導員が笛を吹いてバスを誘導している。活気があった



撮影日2016年6月25日
6月末まであった喫茶店&たこ焼き屋は人気店だった。冬期はこの焼きストーブがあつて暖がとれた



撮影日2016年1月26日
吉田眼鏡店は、レトロ感満載で、大変人気店だった。テレビ出演多数の店主



撮影日2016年9月30日
終バスの雄姿。いすでキュービックが選ばれた

特別なセレモニーは無かったが、誰もが自然と集まった

今春新宿バスターミナル「バスター」の開業したことは記憶に新しい。盛岡バスセンターは、自動車ターミナル法適用第一号施設として昭和35年に開業した、日本最古のバスセンターだ。北海道を除いて最も面積が広い県なのに、鉄道の営業キロ数が少ないためバスは重要な交通機関である。バスセンターはどこに行くにも起点になるため、懐かしい場所である。建物は3階建コンクリート（創業時は2階）で飲食店、売店、喫茶店、時計店の昭和レトロ感が満載であるが、建物の老朽化で9月末をもって営業期間終了となった。代替施設は未定で、道路を隔てて5人以上の客がいると息苦しい程度の広さの仮設待合所2か所を作った。

最終日は報道陣多数が押し寄せる中、バスファンと一般の別れを惜しむ方々が訪れ、見知らぬ方との会話も生まれ、素敵な場になった。ラーメン&蕎麦屋は、終日繁盛していた。僕も昭和感満載の醤油ラーメンを食べた。売店、喫茶店、たこ焼き屋（すべて藤原養蜂所経営）は人気店だったが、6月末で閉店したのが惜しまれる。

イベントは何もしないと宣言していた盛岡バスセンターだったが、最終のバスには最後のアナウンスと蛍の光の音楽が流れ、場を盛り上げた。待合室の椅子張替を担っていた業者さんが泣いているのが印象的だった。そして22時10分発の桜台団地行きの岩手県交通バスは拍手に包まれた。バス出発後は、消灯される時間まで、みなさん思い思いに別れを惜しんだ。

「盛岡バスセンターから考える会」が建物も永久保存しようとする動きもある。